

## 東久留米駅の歴史

市の玄関口、東久留米駅は今年、開業87年を迎えました。平成6年に橋上駅舎ができて西口・東口が開けてから、駅とその周辺の様子はめまぐるしく変化してきましたが、改札が北口一つだった頃や駅の西側が一面の畑だった姿を覚えている人はどれくらいいらっしゃるでしょうか。線路が単線だった頃や長い貨物列車が通り過ぎるのを待たなければならなかった頃、踏切を渡ってホームへ上っていた時代もありました。それも今や遠い昔といった感がありますが、この地に駅が開設されたことによって、純農村であった久留米は都市化へと大きな一歩を踏み出して行きます。駅は、人を運び物を運び、新しい風の吹き込む場所として大きな役割を担ってきました。

### 駅の誕生

東久留米駅が開業したのは、大正4年(1915)4月15日です。明治43年(1910)に設立された武蔵野鉄道(西武池袋線の前身)が、この日池袋～飯能間の営業を開始したのです。開業当初、池袋～所沢間の駅は、東長崎、練馬、石神井、保谷、東久留米の5駅だけでした。

当時の地域開発は鉄道の発達に負うところが大きかったため、明治30年代には私鉄ブームが起こり、多摩地域でも盛んに鉄道が敷かれます。武蔵野鉄道も、飯能町、石神井村、清瀬村、保谷村などの有力者たちが自分の村に鉄道を敷こうという運動を進め、横浜の鉄道資本家平沼専蔵によって設立されました。この鉄道建設に当たっては沿線の地主が土地を無償で提供することが多かったようですが、東久留米駅も神藤庄太郎という人の尽力があって現在の場所に誘致されました。

武蔵野鉄道の敷設に当たって最初に予定されたのは今より北のルートと南よりのルートで、現在の東久留米駅は計画されていませんでした。そこで、村会議員や郡会議員も務めた神藤庄太



貨物倉庫のあった頃の駅 昭和35年(1960)

